

# 友の会だより 4号

都歴研友の会事務局 〒191-0033 東京都日野市百草971-158 増田方

電話・FAX 042-591-1853 fwij2300@mb.infoweb.ne.jp

友の会企画

## 白石／米沢の旅

黒田比佐雄

平成21年10月18日(日)から19日(月)の2日間行われた。参加者は15名であった。

午前10時に東北新幹線白石蔵王駅集合。第1

日目の白石の史跡巡りでお世話になる白石市在住の小片弥先生(元社会科の先生)が出迎えられた。

2日間レンタカーを移動手段に15人乗りのマイクロバスに早速乗車し、出発した。運転は小澤先生に快く引き受けて頂いた。



白石城で

### 白石城と片倉小十郎

白石で訪れたのは「当信寺」、白石城主「片倉家廟所」、「小関家武家屋敷」それに「白石城址」である。市内にある「当信寺」の山門は旧白石城の東口門であるが、ここに

#### 記事一覧

白石・米沢の旅	1
東京で世界史を歩く	4
平城へ行ってきました	6
サハリンの史跡見学	9
台北故宮博物院訪問記	10
『夢魂の人・高野長英私論』	11
『伊豆諸島を知る事典』	13
都歴研等 今年の行事予定	14
光輝く南イタリア・シチリアの旅へ	15
友の会総会報告	19
友の会第2回海外研修のご案内	20



堀に囲まれた武家屋敷



旧制米沢高等工業専門学校本館

は大坂の陣で討ち死にした真田幸村の娘「阿梅の墓」がある。伊達政宗と激戦を交えた幸村は家康本陣攻めの戦いを前にして、娘の行く末を相手方の伊達政宗の側近片倉小十郎に託したのである。「片倉家廟所」は町の西側の愛宕山麓の杉木立の中にあり、五輪塔、多宝塔の墓石が苔むして並んでいた。当時の武家屋敷で唯一残る小関家は、蔵王山系から流れ出る澄んだ川の畔に質素にして凛とした佇まいであった。

「白石城」は戊辰戦争の際の奥羽越列藩同盟結成の会場となるが、片倉家は伊達家の家臣にもかかわらず1万8千石の大名格として一城を持つことを幕府に認可されていた。明治維新で廃城となったが、平成7年、市の事業として、江戸期の資料をもとに工法も含め当時のとおりに再建された。小天主閣であるが威厳のある趣を持つ。

## 上杉家ゆかりの遺品

昼食は白石名産の温麺(うーめん)の店でとり、白石から奥羽山脈の二井宿峠を超え山形県高畠町を経て米沢市に入った。米沢での第1日目は「米沢城址」にある「上杉神社」、重要文化財謙信の甲冑など上杉家ゆかりの遺品(大河ドラマ直江兼続の「愛」の甲冑も展示)を保存する「稽照殿」、「国宝上杉本洛中洛外図屏風」「国宝上杉家文書」を特別公開していた市立上杉博物館を見学した。信長が謙信に贈ったという狩野永徳の筆による「国宝上杉本洛中洛外図屏風」はさすがに保存が良く当時の京都の町衆の風俗や諸建築物の面影を辿るこ

とができ、流石に圧巻であった。

その夜の宿泊は米沢の南方吾妻連峰の懐、白布高湯温泉、茅葺き屋根の「西屋」。米沢牛に舌鼓を打った。

翌日19日はさらに奥の温泉地まで上って紅葉を眺めて市内に降りた。その途中の「笹野観音堂」に立ち寄り、松川(最上川上流)の護岸の「直江の石堤」の跡、「旧制米沢高等工業専門学校本館」、隣接する「林泉寺」、午後は「上杉家御廟」から郊外に出て「成島八幡神社」、最後に「相良人形」の伝統を継ぐ土人形制作所を訪ねた。

「笹野観音堂」は9世紀徳一の開基と伝えられるが、上杉氏の保護もあって今も近隣の信仰も篤



お鷹ぼっぼ

い。この周辺の農民が手慰みにつくった「お鷹ぼっぼ」等の縁起物を上杉鷹山が農家の副業に奨励したことで民芸品「笹野一刀彫り」として商品化された。

## 直江兼続の石堤

市内を縦に流れる松川の氾濫は会津から転封された際に在地化した下級家臣(「原方衆」)らの耕作地を荒廃させた。これを防ぐために直江兼続は治水灌漑事業の一環として、松川上流からの左岸1.2kmにわたって丸石を利用した堅固な堤防を築いた。これが「直江の石堤」である。市内に入っ

て、鷹山の殖産興業策の一環として開発奨励された米沢織の伝統技術を基礎として繊維学科を軸とする「米沢高等工業学校」が創設されたがその本館が現在も活用されている。ルネサンス様式の美しい木造洋館造り校舎で、国の重要文化財に指定されている。

## 大河ドラマの人たちが

この西隣りに曹洞宗「林泉寺」がある。元は謙信が禅修業をした寺で、1617（元和 3）年に越後高田から米沢に移された。ここには上杉家ゆかりの人物の墓が並んでおり、大河ドラマ「直江兼続」の影響もあり観光客が多く訪れていた。主な墓所



墓石に注目

を挙げれば、相並ぶ兼続と妻お舟、上杉景勝の母仙桃院と妻菊姫（武田勝頼の妹）、景勝の家臣甘粕景継（彼は白石が上杉支配下にあった時の城主で、留守の間に伊達政宗の攻撃で城を奪われた）、上杉鷹山側室お豊の方などである。また、これら墓の形状は四角の砂岩石



直江兼続の石堤

の何箇所か丸い穴が穿かれている変わった墓石であった。これはいざ戦となった時の防塁に活用するためと云う。

## 上杉鷹山の殖産興業

昼食は米沢牛の登起波の分店「登」でとり、午後は「上杉家廟所」へ。太い杉木立ちの中に謙信の廟を中心に、景勝、定勝と12代まで左右交互に設けられていた。「成島八幡宮」は市街から北西に離れた郊外の小高い場所にあり、この辺りは上杉家のお狩り場であったようだ。鎌倉期の地頭大江氏やその後の伊達氏の保護のもと崇敬を集めた。政宗の仙台の大崎八幡神社はこの分社である。この地域には鷹山の進めた窯業の成島焼の窯場があったところで、相良家が窯場を営んでいたが、相良作右衛門が京都の人形づくりの技術を学び、土人形を制作したがこれを『相良人形』として売り出した。現在は米沢駅の北側に制作所があり、色彩豊かな土人形を堪能して、この旅の締めくくりとした。

夕方5時頃、米沢駅前で互いの親睦を確かめあい、労をねぎらいつつ解散となった。

「世界の紙と印刷の歴史を訪ねて」



## 東京で世界史を歩く

村木 逸子

### 1 「東京で世界史を歩く」

全国歴史教育研究協議会の東京大会で「東京で世界史を歩く」という企画が始まって今回は3回目でした。日本史では毎回「史跡見学」が行われていましたが世界史にはフィールドワークが無く世界史の教員も世界史に関連するところを見学することができないだろうかとの思いで計画されたものでした。第1回「東京でイスラムを歩く」では代々木上原のイスラムジャーミーを訪ねたり、青山でトルコ料理を味わいました。第2回の「東京でロシアを歩く」では神田ニコライ堂を訪ね、表参道ではロシア料理を味わいつつウクライナの女性の歌を聴くというようなユニークな企画も盛り込まれていました。第3回はどこにするか事務局は苦心されたと思います。「世界の紙と印刷」というテーマで世界史らしい研修を準備してくれました。「友の会からも参加を」とお声掛けもあり喜んで参加いたしました。

### 2 「印刷図書館」でグーテンベルクの印刷機に

印刷関係で最初に訪ねたのは中央区にある「印刷図書館」でした。印刷関係の業界の方々が設立

され、関係資料が収集保存されています。印刷工程に則し、印刷前工程・印刷技術・後加工/応用・・・という分類によって整理されている実用的な図書館です。「年史・社史・歴史」というコーナーに目がとまりました。ケースの中にある世界のコイン、明治初期の印刷物など貴重な資料の実物も見ることができました。

6階に「グーテンベルクの印刷機」(レプリカ)があると聞いて皆さん急いでそちらに向かいました。世界史図説などに出てくる印刷機が目の前にあり大きさや構造を間近に見ることができ感激でした。印刷機は「ワインをつくるためのブドウ搾り器を転用したものである」ことを知りました。なるほど年季の入った大きな木で造られた素朴な形のものでした。

### 3 「印刷博物館」で館長樺山紘一氏の講演

印刷博物館はメトロ有楽町線「江戸川橋」に近いところにあるトッパン印刷のビルにある、大変大きな規模の中味の濃い博物館です。最初に館長樺山先生の講演でした。西洋史専門の先生が西洋美術館の館長であったことは記憶にありましたが、現在はここでご活躍とは知りませんでした。下記に講演の内容については簡単にまとめておきますが、近代社会における印刷の役割について『歴史としての印刷文化』という演題でした。

15世紀のグーテンベルクによって活版印刷が始まるが、それは、金属活字、組版技能、油絵の具を改良した油性インクの利用、羊皮紙から紙への転換、加圧器としての印刷機という5つの技術の集大成であった。写本から印刷への変化はあらゆる分野(聖書から医書・法律書まで)の書物に及び、知の道具としての書物が大きな役割を果たすようになった。

ヨーロッパより早い時期に東アジアにおける印刷文化は中国に始まり朝鮮、日本へと伝わってきた。中国・朝鮮では金属活字の開発が行われ実用化された。活字は木版より長もちし、溶かして再利用することもできる優れたものであるが日本では実用化されず木版印刷であった。ただ、日本で

も 1600 年頃家康がつくった金属活字が使われた例がある。キリシタン版と駿河版の活字印刷があったが禁止されてしまった。活字は一部残っている。金属で活字を作る場合、アルファベットでは活字の数が少なく済むが漢字文化圏では活字を作るのが難しいことが広まらなかった理由の一つであろう。

博物館はプロローグ展示ゾーンから始まります。大きな壁面に、ラスコーの洞窟壁画にはじまり、ロゼッタストーン、楔型文字の書かれた粘土板など人類の歴史の文字解読の史料や技術面の展開などが現在に至るまで立体的に構成され見事でした。ショウケースのなかには「駿河版銅活字組版」もありました。歴史上有名な書物の数々にお目に掛かることができます。

総合展示ゾーンでは、印刷の歴史を5つのブ



ックに分けてそれぞれのブロックで社会、技術、表現の視点にわけて展示されています。印刷技術の進歩発展、これからの印刷技術（デジタル時代のそれ）など興味深い内容です。サインパネルや解説モニターが設置され、画面にタッチすれば丁寧な解説が出てきます。最新の技術で表現され、東西の印刷の歴史がよく分かりました。当日は忙しい見学で、一つ一つをゆっくりみることは出来ませんでした。印刷工房（印刷の家）工房ガイドツアー 体験コーナーなど楽しい実演空間もあり小学生などにも利用できるようになっていました。企画展示ゾーンでは「教科書の歴史」があり、後で訪問した「東書文庫」からの出展でした。

時間不足を嘆きつつ博物館を出て、昼食は同じ建物のなかの「カフェテリア」でした。誰でも利用できますので、この博物館に行くときにはこちら

のご利用もおすすめします。

#### 4 紙と印刷の街「王子」

午後は、再びバスに乗って JR 京浜東北線「王子」駅周辺にある幾つかの博物館巡りでした。王子の名を冠した製紙会社の名がすぐ頭に浮かぶとおり、この地域には「紙」に関係する工場や印刷工場などが多く造られました。〈北区産業遺産ガイド〉によると、「国立印刷局王子工場」「国立印刷局滝野川工場」「東書文庫」「紙の博物館」「渋沢史料館」が見学可能な施設となっています。「国立印刷局滝野川工場」はお札や収入印紙の印刷をおこない「国立印刷局王子工場」では現在は郵便切手などを扱っているそうでこのような地域が東京の一角にあるというのは新しい発見でした。

それぞれに展示にも工夫がみられ中味の濃い博物館です。この中ではまず、「東書文庫」を訪問しました。教科書会社の東京書籍が設立した教科書図書館です。江戸時代の藩校や寺子屋で使用された教科書に始まり現行の教科書まで 15 万冊を所蔵しているそうです。一般にも開放され目録から選び閲覧することが出来るとのこと。ここでは私が小学校 1 年で使用した教科書に出会え感激しました。

王子駅の近くに「洋紙発祥の地碑」がありました。日本の近代産業の設立に貢献した人物と云えば渋沢栄一です。渋沢栄一の設立した工場がこの地にあったことが刻まれていました。渋沢栄一の邸のあったところが飛鳥山の一角で、現在そこに「渋沢史料館」があります。

#### 「渋沢史料館」

常設展示では「渋沢栄一の生涯と事業」と題して氏の関係した事業が図示されていますがその数の多さにあらためて偉大さを感じさせられました。展示内容も見やすく分かりやすく構成され所蔵資料の展示も時々交換されているようです。この時期は特別展「日中米の近代化と実業家」の題で、中国の南通博物館、アメリカのミズリー大学との共催でそれぞれの国の実業家たちの活動について比較研究の成果が発表展示されていました。史料

館では毎年継続して外国の研究者や研究機関との交流の成果を発表しており、活動に注目していきたい史料館です。

洋風茶室「晩香廬」「青淵文庫」など国重要文化財の建物も見学させていただきました。

## 5 最後は「紙の博物館」

「製紙記念館」として旧王子工場内に設立され、1998年に飛鳥山に移転してきた博物館で、ボランティアの方々が丁寧な説明をしてくださいました。入館は2階のエントランスルームから始まり、紙の原料の説明、紙・パルプの製造工程、紙の歴史、製紙産業の歴史、企画展示など、スパイラル状に展示室がつくられ紙に関する歴史や作品が網羅されています。最後には「実演コーナー」に案内され簡単な「紙漉」を行い「MY はがき」を作成してお土産とするサービスもありました。パピルスに出会えたのが「世界史」の教員にとっての締めもの研修ともなりました。

見学するところが盛り沢山で、これを準備された先生方は大変だったと思います。本当にありがとうございました。このような試みは全歴研の東京大会が実施された場合にはまた計画していただけたらと思いました。参加者はかわりますから、同じところを選んでよいと思います。

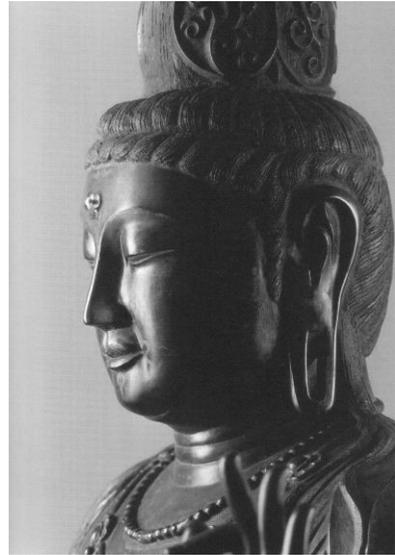
東京在住の方のために(友の会の会員ののために)それぞれの場所と連絡先を付記します。ご活用下さい。「出版図書館」は会員のみ利用となっているとのことで載せてありません。



渋沢史料館 〒114-0024 東京都北区西ヶ原 2-16-1  
京浜東北線王子駅南口徒歩5分  
03-3910-0005 <http://www.shibusawa.or.jp>  
紙の博物館 114-0002 北区王子 1-1-3  
京浜東北線王子駅南口徒歩5分  
03-3916-2320 <http://www.papermuseum.jp>  
印刷博物館 〒112-8531 東京都文京 1-3-3 トップラン小  
石川ビル 有楽町線「江戸川橋」駅徒歩8分  
03-5840-2300 <http://www.printing-museum.org/>  
東書文庫 〒114-8524 北区船堀 2-17-1  
京浜東北線王子駅南口 徒歩10分  
03-3927-3680 <http://www.tosho-bunko.jp/>

# なら 平城へ行ってきました

重政文三郎



薬師寺聖観音 (入江泰吉氏撮影)

## 平城天皇陵の謎

今年には平城遷都1300年ということで、奈良は大変にぎわっているようです。タクシーの運転手が、「リタイアの人ががどンドン来ている」というていたが、私たち「友の会平城京見学会」一行もその群れに入っていました。

大極殿が公開される直前の4月12日、小雨の降る中を傘を差しながらの見学でした。平城宮の大極殿は、公開10日ほど前ということで、塀の外から見上げるだけで我慢しました。原色の朱色とシビの金色が印象的で、歴史的建造物というより、大イベントの建物を見る思いでした。色の鮮やかなのは、1300年前もかくや、と感じればいいのだと思います。

そのすぐ近くに、市庭古墳があります。陵墓参考地として宮内庁管理のいかめしい、しかしどこの天皇陵でも同じ風景の石の垣根と鳥居のある小山でした。この古墳は平城天皇陵とされています。この古墳は、平城京をつくる時に前方後円墳の方形の部分の部分が削り取られて破壊され、その上に平城宮が造られたことが近年わかったのです。なぜ

天皇の祖先の墓を破壊して天皇の都を造ったのか。この謎はなかなか興味深いことです。答えは二つ、①天皇陵といわれるが天皇の古墳ではない、②古墳であったことを8世紀にはもう忘れていた。さらに、平城天皇は8世紀の人なのに5世紀の前方後円墳であるという謎もあります。陵墓参考地のあやふやさを示す話としてよく引き合いに出されることです。

今回のご案内をしてくださった小澤先生から、別の考え方を教えていただきました。それは、平城京のランドマークタワーとして、この小山が必要だったということです。確かに先ほど見た大極殿の真北、平城京を取り囲む四神のうち玄武の位置を占めています。この山に登ればおそらく平城京を見渡すことができる、逆にいえば、この小山を基準点として平城京が設計された、ということでしょう。北京の紫禁城でも同じような基準になる人工の山（景山公園）が北からの殺気を防いでいるのだそうです。都の設計といえば、藤原京から真北に大和平野を20数キロメートル貫通して伸びる下ッ道の直線上に平城京が設計されているというのも、古代の建築や測量の技術の確かさを感心させられることとして有名です。

### 古き佛たちの魅力

西の京へ向かいました。久々の薬師寺でした。新しい建物が次々できていました。「凍れる音楽」と評された美しい東塔だけが、私の記憶ですが、新しい、これも原色の朱が輝く西塔が佇立していただけではなく、金堂も講堂も完成していました。有名な薬師如来像と脇侍の日光・月光像は、金堂の中に安置されていました。数年前に東京の博物館でお目にかかった日光・月光像ですが、ここで見るこの佛たちもまた、なかなか魅惑的でした。

魅惑的と書いてしまいました。仏像は「人の姿に人間以上の威厳を表現したもの」だといわれます。確かに東大寺で公開されていた重源像のような、人間自身を写實的に彫刻した像と比べれば、仏像のもつ現世と時間を超越した姿は、まさに信仰の対象なのでしょう。しかしそこに魅力的な人

間らしさの発見する楽しみを捨て切れません。今回ここへ来る前日に訪ねた室生寺の十一面観音の、初々しい少女のような面差しに魅され、聖林寺の十一面観音の峻厳な美男のたたずまいに心打たれたのでした。

薬師寺といえば東院堂の聖観音菩薩像には、翌日、奈良国立博物館の「大遣唐使展」でお目にかかりました。入場してすぐに、唐代の石仏と並んで立っていました。聖観音像の源流とされるのが唐のこの石仏（ペンシルバニア大学蔵）で、遣唐使がもたらした文化を語るこの展覧会のシンボルとなっていました。聖観音は、私には見上げるような威厳のある仏像なのですが、近くで、買ったばかりの一眼鏡を使って拝顔したとき、写真で見たのとは違って威厳に満ちた表情の中に、人間のもつ美しい魅力にこころ惹かれ、私たちはかなり長い時間そこに佇んでいました。

### 吉備真備の物語

「大遣唐使展」では、二人の日本人のことを初めて知るきっかけを得ました。一人は吉備真備、もうひとり井真成です。

吉備真備は、2度も遣唐使として入唐した奈良時代の学者であり、右大臣にまで上り詰めた政治家でもありました。今回の奈良見学の直前、テレビドラマ「大仏開眼」の吉岡くんのイメージで予備知識はありましたが、大遣唐使展での吉備真備は、「吉備大臣入唐記絵詞」（ボストン美術館蔵）に描かれた楽しい人物像で、唐の意地の悪い妨害を跳ね返したスーパーマンとして紹介されていました。「文選」を読ませて間違うのを笑ってやろう、囲碁で負かしてやろう、そして難しい漢詩を読ませようとしたが、吉備大臣は密かに現れた鬼の秘術による助けをうけて、ことごとく難題をはね返し、最後には「唐土の日月を双六の筒に封じ込めてしまった」ので、唐の人たちは驚いて帰朝を許した、という物語でした。『扶桑略記』に書かれていることはこうです。吉備真備は留学17年間のうちに、三史、五経、つまり儒学だけでなく算術や天文、陰陽、暦学など13道を極めたが、その

優秀さの故に帰朝が許されなかった。ところが真備は、「日月を封じ込め十カ日の間天下の時を怪動せしめた」のでついに許された。『扶桑略記』もまた、『入唐絵巻』と同じ事、日月を封じ込めるといふ秘術を使ったことを記している、つまり天文学の深い知識があったということなのでしょう。吉備真備は、帰朝後阿倍内親王（のちの孝謙・称徳天皇）の家庭教師となり、また藤原冬嗣の乱を制して政界にも進出、権力者藤原仲麻呂とわたりあい、仲麻呂の乱の後、政権の中枢に上りました。しかし頼山陽や大日本史は真備が嫌いだったそうです。太政大臣道鏡の下で右大臣だったからでしょうか。吉備真備には万葉集にも懐風藻にも和歌や漢詩が残っていない、専ら実学を修め、律令を整備し、道鏡に与することなく、権謀術数を弄することなく、人に敬われるような学者政治家であった、ということです。舶来の暦（大衍暦）を日本にもたらし、カタカナを発明したとさえいわれます。偉大なる凡人だったところに、私は惹かれました。（宮田俊彦『吉備真備』を参考）

### 留学生「<sup>せい</sup>井真成」の墓誌

井真成のことは遣唐使の留学生で中国の西安でごく最近墓誌が発見されたというニュースだけはおぼろに知っていたのですが、この展示で、直接その肉声に接したように思いました。2004年に発見された墓誌が読めるような展示ですが、最初の文字は「公姓井、字真成、国号日本」とあり、中国大陸に長く埋もれていたこの碑に、「国号日本」の文字のあることに新鮮な驚きを感じたのです。井真成は唐名で日本では藤井または葛井氏で藤井寺の出身であろうといわれています。717年第10回遣唐使の一員で入唐し、17年間も勉学に励んでいた優秀な留学生、その若き死を悼んで玄宗皇帝が「尚衣奉御」（皇帝の衣服を管理する役職）を贈ったという。墓誌は終わりに、「哀茲遠方形既埋於異土魂庶歸於故郷」と、悲痛な言葉で結ばれていました。この名もなき異境の一留学生のために、玄宗皇帝が墓誌を誰かに書かせたのであろうとされています。書いたのは誰か、同じく



墓誌の拓本

遣唐留学生で、唐王朝で重く用いられながらついに帰朝することが叶わなかった、あの阿倍仲麻呂ではないかといわれます。最後の文字には、阿倍仲麻呂の望郷の想いが重なって聞こえてくるようでした。

### 若葉して 御目の雫 拭はばや

さて、遣唐使といえば鑑真和上に触れなければなりません。唐招提寺も見学しましたが、御影堂は公開日ではなく、東山魁夷の壮大な障壁画を見ること叶わず（平山郁夫の大唐西域壁画は薬師寺隣にできた玄奘三蔵院伽藍の壁画殿で堪能しました）、お目当ての鑑真像にもめぐり会うことができませんでした。ただ、唐招提寺の境内では芭蕉の「若葉して 御目の雫 拭はばや」

の句碑に接して、鑑真和上の不屈の日本渡海を偲ぶのみでした。6度目の挑戦となった鑑真の渡海は、再度入唐した吉備真備の帰国と同じ遣唐使団で、鑑真が第2船、真備は第3船だったそうです。ちなみに第1船には鑑真の乗船を拒否した遣唐大使藤原清河とあの阿倍仲麻呂が乗船、漂流してついに日本へ帰り着くことはできなかったそうです。

唐招提寺にはこんな歌碑も目にしました。「おほてらの まろきはしらの つきかげを つちに ふみつつ ものをこそおもへ」会津ハル歌碑句碑はその場所でこそ味わいをかみしめるものです。こうして私たちの見学会は、唐招提寺門前で、鑑真や、吉備真備に想いをはせながら記念写真に収まったのでした。

## 「サハリンの史跡見学」に参加して

### 加藤 直道

全歴研主催の夏季史跡見学会は、前年の台湾に続いてサハリンで、平成21年8月18日より5日間の日程で行われた。日本統治時代の遺物・遺跡を訪ねるのが共通する主目的であった。

台湾の時と同様、樺太島の南北を縦断して、寝台列車で北上し、北緯50度線を越えた。帰途はバスを利用して日本領時代の豊原・真岡・大泊等の公共建築物や、寺院・神社と工場等の跡地と、終戦前後の日ソ両軍の戦場跡を見た。

旧樺太庁長官公邸がサハリン知事公邸として利用されているのは、旧台湾総督府が、台湾総統府に利用されたり、樺太（サハリン）博物館や台湾中央病院がそのまま使われているのと好一对である。これらと対照的なのは、韓国における日本領時代の建造物が殆ど破壊されたことで、半島人の国民感情を如実に表しているものと我々は深く反省せねばなるまい。

しかし、樺太でも寺社は、石段や礎石等を除いてすべて壊されていた。小学校の奉安殿は内地より大きく立派なものが多かったが、倉庫として活用されていた。旧王子製紙や旧富士製紙の工場跡地は広大で、廃屋ながらソ連時代や現代ロシアにもない程の巨大さであった。敷香（シスカ）の旧王子製紙工場は、10年くらい前まで別の用途で稼働していたという。

昭和20年8月の終戦時、樺太でも日ソ両軍の本格的な戦闘があり、両軍とも約2500名の戦死者を出したという。日本軍のトーチカが多数残り、各地にソ連の戦勝記念碑やレーニン像が散見された。ソ連軍侵攻を伝えて悲壮な最期を遂げた電話交換手のいた電話局は、跡形もなかった。

サハリン全土で目立ったことは、日本車、特に



トヨタ車の多いことであった。現在のサハリンは、石油と天然ガスの採掘で景気はよいが、道路等のインフラの整備が遅れている。年金が少ないのに当地は物価が高いので、退職後は物価の安い本土に移住する人が多いと、通訳のオリガ氏が語った。優秀なガイドであった。

尚、今回のツアーには、東京、神奈川、新潟、京都、兵庫から13名が参加し、団長は国立高校長池口康夫先生であった。

私は、外国旅行では史跡の他、動物や植物の分布にも興味をもって臨んでいる。津軽海峡の南北で、動植物の分布に差違のあること（ブラキストン・ライン）を発見したのは、幕末、函館にきたイギリス軍人・動物学者のブラキストンであるが、サハリンの植物相は北海道に類似する。落葉松等マツ科とカバノキ科の樹木が主で、イタドリや野生の牛蒡が目立った。ロシア人は牛蒡を食べないと通訳が語った。戦時中アメリカ兵捕虜の食事に牛蒡を出したのを木の根と誤解され、戦後、日本兵が有罪とされたという。犬を食べる漢民族、カンガルーを食べるオーストラリア人、鯨を食べる日本人等々、他民族の食文化を理解することはなんと難しいことか。サハリンの料理は、素朴で味が薄く、日本人の口に合うものが多かったように思う。珍しい体験の数々であった。

# 台北故宮博物院訪問記



## 豊田岩男



清朝の世宗雍正帝文物大展が台北の故宮博物院で、2009.10.07～2010.01.10の期間に開催された。北京の故宮博物院から37点の文物が出品され、北京・紫禁城の秘宝が「二つの故宮」に分断されて60年、両館初の記念すべき共同展覧会が、台湾の故宮博物院で開催されたのである。

徳川8代將軍吉宗とほぼ同時代の雍正帝は、清朝第五代の皇帝であり、清朝の政治基盤を確立させた優れた君主だったようである。（学者により意見は分かれる）

中国文化の象徴ともいえる陶器は雍正帝の保護奨励策もあり、その最高傑作と考えられる「琺瑯彩」磁器はこの時代に作り出されたのである。現在に伝わる琺瑯彩磁器は、世界中のものを合わせても

五百余点しかないといわれ、日本にも何点か伝来している。今回の展覧会には、北京故宮博物院所蔵の「銅胎畫琺瑯花卉壽字紋壺」等も展示されていた。

また、絵画では「雍正帝朝服像」や「胤禛行樂図像冊」（胤禛は雍正帝の実名）、6葉の「美人図」、郎世寧（カステリオーネ）筆「百駿図」等も北京から持って来られていた。

\*

私は、今回の展覧会が終了する直前の1月7日から2泊3日、「HIS」という旅行会社を初めて利用して台北までの旅行をしてきた。私の台湾訪問は、2001年8月の全歴研の海外研修旅行以来2回目だった。費用はお土産代も含めて一人当たり5万円弱。最格安プランより、ホテルはCクラスからBクラスに格上げし、帰国は午前便から午後便にして滞在時間を半日延ばしての費用であった。

旅行の内容は、初日はホテル泊まりで、2日目は昼食付きの台北市内の観光、最終日は自由行動とし、旅行全体の内容は各人が組み立てることが出来た。私は、最終日を故宮見学の日とした。

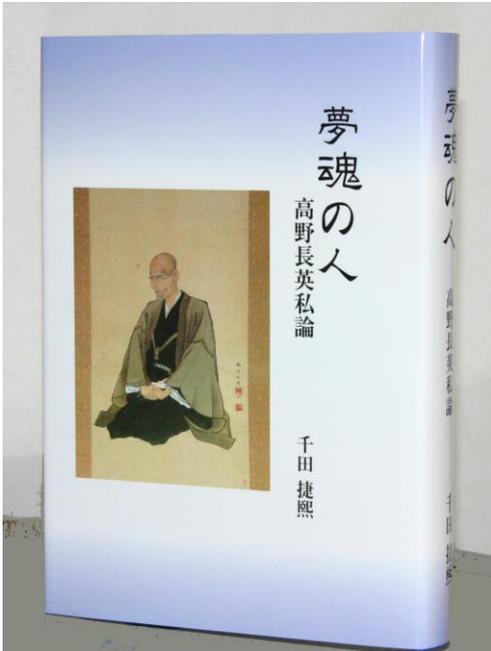
成田に指定の時間に集まり、他の旅行社が集めた人たちと合流し、台北に向かった。連日ジャンボ機1台分の日本人が台湾に旅行しているらしい。大陸の中国人は連日8000人が台湾に観光旅行に来ているということであった。故宮見学の日、混雑を予想して、開館前に最前列に並んだ私たちの前にそ知らぬ顔をして割り込もうとした中国人が複数いた。館内では大声を出して喋りながら回る中国人団体が多くあり、彼等のマナーはまだまだであると感じた。

2日目の市内観光は、雨天ではあったが前回に来たところもあり、結構覚えていることが多く、自分の記憶力にやや自信を持つことが出来た。

故宮博物院やその周辺の整備ぶりには目を見張るものがあり、展示の内容も様変わりして、学術的に良く考えられたものになっていた。もう半日ほど見ていたいと思った。

## 『夢魂の人 高野長英私論』

について覚書 千田捷熙



「四年間にわたって『三高教室』に幕末の蘭学者高野長英について論じてきました。彼は矛盾に満ち、虚飾にまみれた江戸の末期、新しい時代を切り拓くべき真理の光を鎖国日本に導きいれんとの大いなる志を立てます。著書『夢物語』のために獄に囚われ、数年後、脱獄した彼は、逃亡しながら蘭学研究を続け、追っ手を逃れるために顔に硝酸をかけて人相を変え江戸に潜伏しました。遂には追いつめられ悲劇的な最期を迎えました。長英は学問する者の真髓を『人は学ぶためには食わねばならない。しかし、食うために学んではならない』と語っています。私は、己の命ずるところに従い、内的必然を生き抜いた長英の生涯を論じ

ることによって、日々勉学にいそしむ諸君にエールを送ってきました。」

これは、私が両国高校在任中、卒業式で述べた式辞の一節。両国高校では、各教科の教員が交代で、それぞれの専門分野から、大学の教養レベルに相当する論文を、生徒向け誌上特別講義として『三高教室』に発表していました。教員は交代ですが、校長は毎回書かねばなりませんから、かなり大きな負担ではありました。結局、この機会に全八回のシリーズで幕末の蘭学者高野長英について研究してみようと思立ったのです。

私は、自分の郷里である岩手県水沢（現奥州市）から輩出された高野長英を、二・二六事件で暗殺された斉藤実、東京市長を勤めた後藤新平と並ぶ偉人として、幼い頃から耳にしていました。長英について詳しいことは知りませんでしたが、他の二人に比べ、どこか暗く重たい生涯を送った人物という印象がありました。確かに、優れた蘭学者ではありましたが、小伝馬町の牢屋に入れられ、そこを脱獄して日本中を逃げ回り、顔を焼いて人相を変え江戸に潜伏したものの、ついに発見され、斬殺されました。高名な蘭学者は人々が最も忌み怖れた政治犯、脱獄囚、逃亡者に転落したのです。明治新政府による名誉回復までは、高野家を初め郷里の人々も、彼を匿った各地の人々も、お上を恐れ世間をはばかり、黙して語らなかったのです。貴重な資料の多くが処分され、彼の事蹟・足跡を確証する手がかりが非常に少なくなってしまいました。それが高野長英を研究する上で最大の障害です。にもかかわらず、高野長運氏による献身的な調査・研究によって多くの資料が陽の目を観るようになり、『全集』まで刊行されています。しかしなお、入獄から逃亡中の足跡については、伝聞・伝説が多く扱いに苦慮しました。

私は、拙著の中で、高野長英について次のような考えを述べてみました。

「抜群の語学力と想像力を駆使してヨーロッパ近代の普遍性とその威力を、かなりの程度リアル

に認識する事のできた高野長英は、そこにまた日本の進むべき必然的可能性と克服すべき困難をも予知していたのである。しかも、それは単なる洋学かぶれの新しがり屋といった、内実は変わらぬままに表層を銜う外面的・実利的な知識としてではなく、学問によって普遍的真理の扉を開くために身を捧げ、奉仕するという内発的な衝動が思想にまで内面化された理念として、彼の生き方を左右する質のものであった。」(六-四頁)

さて、毀誉褒貶の激しい人柄、思想的スケールの大きさ、そして、激しく生き急いだ生涯、そのような長英を長英たらしめた契機は、何処に求められるのかを改めて考えてみました。

一つはシーボルトとの出会いであり、もう一つは高野家跡目相続＝結婚問題であったと思います。弱冠二十七歳の医者であり博物学者でもあったシーボルトから最新の理論や技術を学び、抜群の語学力を駆使して豊富なオランダ語文献を研究するなど、四年間学究生活に浸りきりました。その間、長英の想像力・構想力ははるかに海を越え、ヨーロッパ近代の普遍性と実相を理解し垣間見ることができたと思います。それによって、子供の頃、みちのくの田舎町で身につけてきた規範意識や価値観が大きく揺すぶられたのは明らかです。

しかし、およそ浮世離れしたような勤学三昧の長崎遊学生活も大きな曲がり角に直面します。蘭学者としては最高レベルの知識を修得した長英の学問が、はたしてどこまで本物であるか試される時がやってきます。すなわち、養父が亡くなり、その娘千越(ちお)を嫁に迎えて高野家を引き継ぐべしという、ごく当たり前の現実が、彼を郷里に呼び戻そうとするのです。

帰らねば、千越との婚約破談と高野家の断絶という破局を免れない。帰らずに江戸で学問を続けるのは、これまでに十分過ぎるほどの勉強をさせてきたと信じている郷里からすれば、長英のエゴイズムとしか映らない。

一方、水沢に帰れば、成し遂げたい学問研究を途中で放棄してしまうことになる。ちなみに長崎帰りの蘭学者高野長英には、立身出世の晴れがま

しい未来が保証されていました。しかし、それがどんなに名誉であり家族の誇りであろうとも、長英自身は心にポッカリ穴の開いた抜け殻の人生を送ることにしかなかったでしょう。

許婚千越女に宛てた手紙には、その時の苦しい胸の内を、次のように認めています。

〈昨日は非常な心痛で、夜更けまであちこちに相談に乗ってもらったが、どうしたら良いかわからない。自分のやりかけている研究は一日も手ばなしにはできない、そうは言っても高野家の断絶になることを打ち捨てて置くこともできない。(中略)高野家の難儀は皆、自分のせいであり、お前もさぞかし恨んでいるであろう、母もどんなにか腹を立てていることであろう、お前からも良くお詫びを伝えておいてもらいたい。(中略)本当は明日にも帰りたい気持ちだが、しかし、今水沢に帰るということは死んでしまうのと同じことです。〉

結局彼は、郷里に帰らず、武士身分を捨て、一介の町医者に転身しました。長英の目指す先端的な蘭学研究は絶えず新しい情報と刺激、一定のスピードある生活環境を必要としたのです。それらは格式と前例を重んじる水沢藩における仕官勤めや何事もゆったりとした田舎町の生活では容易に得られるものではなかったのです。

シーボルトに学んだ者たちの多くが、蘭学の知識と技術を駆使して幕府や藩の知恵袋となり、常に自分の守るべき領分と分別には忠実であったのです。しかし、長英は郷里が差し出した抜き差しならない現実生活の枠組みに屈することなく、自ら抱え込んでしまった普遍的課題に衝き動かされ、己の信じる道を歩み続けます。将来を保証するルートに乗ることを拒絶してしまいました。有用性を越えるヨーロッパ近代の理念そのものを追求せずにはいられなかったのです。

蘭学のために家族を捨て、藩を捨て、特権身分から降りることによって、かえって庶民社会により深く豊かで、自由な活動空間を獲得していきます。「人は学ぶためには食わねばならない。しかし、食うために学んではならない」を一つの理念として、知識人であることと生活者であることとの二

重性とその矛盾を生き抜くことを選んだのです。すなわち、およそ学問とはほど遠い高野家を相続するかどうかという私的な問題のために七転八倒しながら苦しみ抜いたからこそ、蘭学は高野長英の内部において思想的営為にまで深化され、彼の生き方そのものの基軸になったのです。しかもその基軸の裏面には、ヨーロッパ世界に通底するような、新しい時代の出現を予兆する歴史的胎動を、庶民的生活感情の奥底に感得してしまう人間高野長英が存在したのだ、と考えます。

以上の観点を挿入することによって、たとえば「蛮社の獄」における渡辺崋山と高野長英二人の身の処し方の違いや、長英の過酷な獄中生活と放火脱獄後の逃亡生活の意義を理解する手がかりが得られるように思われます。

そろそろ紙数が尽きてきましたので、この辺で筆を収めることにいたします。己の力のなさや時間の不足を痛感しながら、それでも一冊の本にまとめようとした私の思いと経緯の一端を紹介いたしました。

◆高野長英研究会に直接お申込みいただく場合  
定価：3990円+送料310円 計4300円(代金後払い)  
e-mail y-chida@fsinet.or.jp  
FAX 0197-46-2302

◆通販で購入いただけます。  
ISBN 978-4-324-80018-8

## 『伊豆諸島を知る事典』

### の出版について

樋口秀司

この度、神田神保町の「東京堂出版」から、『伊豆諸島を知る事典』を出版することになりましたので、紹介させていただきます。四六版、本文約300ページ、縦組の上製カバー装、「知る事典」シリーズの1冊です。内容は、現在島民が生活している伊豆諸島の9つの島々(伊豆大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、青ヶ島)について、歴史、自然、民俗、人物(流人を含む)、地名、名所、旧跡、文化財などを中心に紹介するものです。定価は2,800円。刊行は平成22年8月上旬(できれば7月末に出したい)です。

編集が私になっていますが、各島々の友人達に執筆をお願い致しました。従って、それぞれの執筆者の自分の島への思い入れが滲み出ており、全体が統一されていないところもありますが、それがかえって良かった、と思っています。私は、元々伊豆大島の出身で、大島高校勤務が長く、都立東大和南高校でも日本史を担当していました。その後、大島の第二中学校に赴任しますが、さらに八丈島の富士中学校に4年、青ヶ島小中学校に2年、最後は大島の第三中学校で退職になりました。これらの経験が、それぞれの島々でいろいろな人達と出会い、今回の出版に繋がっています。

出版の直接のきっかけは、全歴研や都歴研の史跡見学会の時にお会いする佐々木虔一先生でした。お会いする度に、「伊豆諸島や小笠原諸島についての辞典(事典)は見たことがないけど、もし出す気があるなら紹介するよ。」と声をかけられていました。個人的には、「伊豆大島百科事典」とでもいえるような本を一生かけてまとめてみたいなあ、旅行会社のガイドブックではなく、もっと読ませるような伊豆諸島についての本があると

## 募集

『ほん本hon』『歴史随想』  
へ寄稿してください

友の会会員の皆様は、定年後の晴耕雨読の中で、研究活動、執筆活動、地域活動などをなさっている方が多いと聞きます。会員相互のコミュニケーションとして、それら活動の紹介をしていきたいと思えます。寄稿をお待ちします。

字数 2000字程度

写真 関連する写真があるとありがたい

送付 eメールまたはフロッピーディスク

shigemasa@r4.dion.ne.jp

町田市成瀬台3-35-19 重政宛

いいなあ、などと思っていましたので、佐々木先生からのお話はいい話だなあ、と思いました。でも、小笠原には一度しか行ったことがないし、小笠原諸島まで入れたら分厚い本になってしまうなあ、とためらっていました。八丈島、青ヶ島にも住んでいたし、各島々に友人もいるし、その人達に頼めば、「伊豆諸島」だけなら出せるかも知れない、と考え、佐々木先生に相談したわけです。その結果、昨年の世田谷地区の春季見学会の翌日3月16日に、佐々木先生と東京堂出版にお伺いして、松林孝志社長にお会いし、出版が決まった次第です。

私も島の人間にとっては、今回の『伊豆諸島を知る事典』の出版は大変ありがたいことです。平成22年頃の伊豆諸島はどんな様子なのかを知ることができるのですから、後々価値の出る伊豆諸島に関する歴史的な文献の一つであるということが出来ます。ただ、この本を求めて下さる方が何人いるのか、ということが、ただただ心配です。そこで、友の会の皆さんにご協力をお願いしたいのです。私が学生時代から古本屋で伊豆諸島、小笠原諸島の文献を集めてきた経験からいうと、こ

の『伊豆諸島を知る事典』は、時間が経てば経つほど値打ちが出てきて、高い値段が付くだろう、と思っております。私が言うのですから間違いはありません。1冊と言わず、2冊求め、1冊は大事に手許に置き、もう1冊は身近な人に紹介してやる、こういう男気のある、格好いい人達の集まりが「友の会」だと思っておりますので、何卒ご協力をお願い致します。

この8月6日(金)竹芝棧橋乗船、7日に三宅島を見学し宿泊、8日の午後の飛行機で帰京の日程で「三宅島見学会」が実施されます。この都歴研の企画は、平成7年に伊豆大島、平成12年に八丈島、平成17年に新島・式根島をそれぞれ30数名で実施してきましたが、それに続く「黒潮文化圏を訪ねる」の第4回目となるものです。講師の三宅高校の山本政信先生は『伊豆諸島を知る事典』の執筆者の一人です。是非、お近くの書店に予約注文していただき、三宅島に持参して下さることを願っております。

それでは、「友の会」の皆様方のますますのご健勝を祈念致します。

## 都歴研等 今年の行事予定

### 全歴研51回大会

7/28(水)～30(金) 会場 岡山市「アークホテル岡山」他

基本テーマ「現代の視点に立ち、過去と未来をつなぐ歴史教育の創造をめざして」

- ・分科会 日本史、世界史
- ・講演「アジアと日本の近代～国民国家と帝国への視点」山室信一(京大人文研教授)
- ・史跡見学会 A《備前岡山の匠と文化の足跡を訪ねて》  
B《古代から現代へ～岡山の歴史絵巻を辿る旅》

申込みは、全歴研ホームページで <http://members3.jcom.home.ne.jp/zenreki-hp/>

### 全歴研海外研修旅行

8/18(水)～22(日) 中国山東省史跡めぐり 一孔子・孟子の故地を訪ねて一  
費用 128,000円

### 都歴研講演会

6/19(土)「『資料を読む』ということ～洛中洛外屏風を例に」小島道裕教授(歴博)  
12/ 予定

### 都歴研夏季史跡見学

8/6(金)～8日(日) 黒潮文化圏をめぐる 第4回「三宅島」  
ほかに、秋季(11月)、春季(3月)に見学会を予定

### 関歴研栃木大会

11/5(金) 会場 栃木県足利市 講演(三谷 博 東大教授)

## 光輝く南イタリア・シチリアの旅へ

村木 逸子



2008年の「イタリア研修旅行」に続いて再びイタリアへ。今回は南イタリアです。時期は少し寒くなりますが2010年12月3日(金)~10日(金)成田からローマへ。そこから南へ、まずはナポリから始まります。訪れる順に紹介します。

### 再びイタリアへ

私の好きな陣内秀信先生の「南イタリアへ！」—地中海都市と文化の旅—(講談社現代新書)に案内してもらいましょう。陣内先生はイタリアをホームグラウンドにしている建築学の先生です。少し違った観点から歴史を語ってくれます。今回の旅行の予習に必携の書です。

世界史の教科書に最初に出てくるイタリアの都市はネアポリス、ギリシャ人の植民によって出来た都市で現在のナポリのことです。ナポリには、イタリアの都市には珍しく一部に格子状の街路があり、これはギリシャ都市の名残りということ です。

B. C. 326年にネアポリスはローマの支配下にはいりますが、ギリシャの伝統は色濃く残り、西ローマの滅亡とゲルマンの侵入で混乱した後はビザンチン帝国を名目的宗主として独立的な立場を数百年間とっていました。地中海の中央に位置し、ヴェスビオス山を望む風光明媚な良港をもつナポリは12世紀から諸外国の王朝の支配を受けます。まずノルマンの支配が100年(後述)、続いてドイ

ツ系、フランス系、スペイン系の王朝がこの地を支配します。ナポリ人としてのアイデンティティはどこにあるのか戸惑うところです。1860年にイタリア王国に統一されますが、北部・中部のイタリアとは必ずしもじっくりしているわけではありません。それはこの複雑な歴史に由来することがよくわかります。

ナポリの風景と言えば噴煙をあげるヴェスビオス山です。標高1277m美しい姿を見せていますが、79年、大爆発を起こし火山灰や溶岩で裾野の町を埋め尽くしてしまったことは有名です。繁栄していた都市ポンペイやエルコラーノは一気に埋没してしまい、それがどこにあるのかも明らかではありませんでした。

### ローマ帝政時代の繁栄都市 ポンペイ

ナポリの東南22キロのところにある史跡がポンペイです。火山の爆発によって一瞬にして姿を消し、近代になって発掘によって当時の姿を復元できたというこの史跡には限りないロマンがあります。歴史好きな人に限らず一度は訪れたいところです。

ポンペイはナポリ湾に臨み、内陸とは河で往来出来るという交通の要衝に栄えた古代都市です。紀元前2世紀にローマの支配下に入り、更に発展し富裕なローマ人の別荘地としても有名になりました。人口15,000人の都市に5,000人が入場できる野外劇場や20,000人が入れる円形闘技場がつくられたことは近隣から多くの人がこの地にやって来ていた証拠となっています。

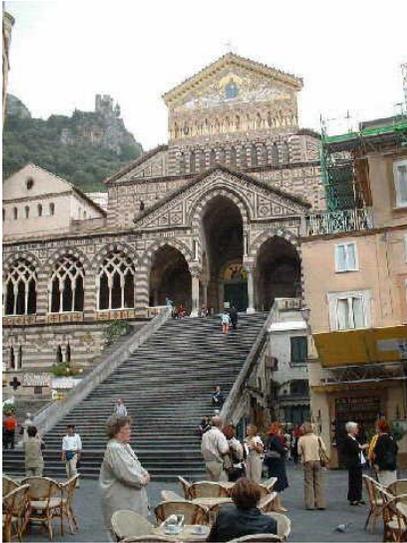
姿を消してから千数百年、その位置も不明になりブドウ畑になっていたそうですが、1700年代になり、住居を建てるために石材を探していたとこ

る地下に埋まった古代建築が見いだされ 1763 年に「ポンペイ」と判明しました。19 世紀から学問的発掘調査が行われ現在もお発掘が行われています。劇場も闘技場も発掘されています。

## アマルフィー

2 年ほど前にここを舞台に映画が作られ一躍有名になった都市です。中世のイタリアで繁栄した海洋都市国家として、

ピサ、ジェノヴァ、ヴェネチアがありますが、それらの都市よりはやく東地中海や北アフリカとの交



易で栄えた都市です。立地の仕方がユニークです。民族の侵入や政争で暮れた中世では人々は天然の要塞にあたるようなところに居住しました。アマルフィーは前面が海に面してはいますが三方は山です。その狭い所にひしめき合って住宅が造られ海上交易でイスラム世界との交易も活発でした。中央にあるドゥオモにもアラブの工芸がちりばめられています。

陣内先生はこのユニークな都市に惹かれ研究対象にされているようで、実に詳しくアマルフィーの市街の特徴を上述の本で述べています。イスラムの建築や町作りについて知ってからこの都市を訪ねるとたとえ短時間でも感動するに違いありません。観光地として有名ですからそれだけに目を奪われます。それだけでは勿体ない。南イタリアには北イタリアとは異なる重層的な歴史が潜んでいるのです。

## アルベルベッロのトゥルツリと

### マテラの洞窟都市サッシ

おとぎの国にあるようなトンガリ屋根の民家がトゥルツリです。また、洞窟を掘って住宅にした洞窟都市がサッシです。陣内先生がイタリアに留学していた若き学生の頃に関心をもって調べていたということで、トゥルツリもサッシもどのような構造の建物かが詳しく書かれています。どうぞじっくりとお読みください。トゥルツリは南イタリアの各所にあるそうですがアルベルベッロが最も有名ですし観光地として整備されているようです。サッシのはじめはギリシャから逃げてきた正教の修道僧達が造った祈りと修養の場ということが南イタリアの宗教事情や文化を想像させます。ローマ教会のお膝元にありながら地中海でギリシャやエジプトに繋がる南イタリアは独自の文化圏を構成してきたようです。



## シチリア 異文化の匂いのする島

南イタリアの中でもシチリアはその地理的位置の重要さから複雑な歴史を持つ島です。世界史では、まずフェニキア人やギリシャ人の植民都市がつけられた島として登場します。シチリア島東南部にあるギリシャ人都市シラクサーはアルキメデスが生まれたポリスです。アグリジェントにはギリシャ人のつくった大きな神殿の遺跡がありその繁栄ぶりが偲ばれます。エトナ山を背景にもつ景勝の地タオルミーナもギリシャ人起源の都市です。

紀元前3世紀から始まるローマとカルタゴの戦いはまずシチリアの争奪戦でした。この戦いで勝ったローマはシチリア島を最初の属州としました。シチリアは「豊かな穀倉地帯」としてローマの繁栄には欠かせぬ属州となりました。北からのゲルマン諸民族の侵入により帝国が瓦解し荒廃化したイタリアを立て直したのはコンスタンチヌープルに政府を置く東ローマ帝国



(ビザンチン帝国) でした。シチリアにはビザンツの文化がひろまりました。公用語はギリシャ語でした。しかし、富の収奪も激しく、島は貧しい人が多くなりました。

アラビア半島から始まったイスラム世界は瞬間に地中海を我が海にしていけます。シチリア島には9世紀から北アフリカのイスラム勢力が入ってきます。ビザンツ帝国の収奪に苦しんでいた住民は宗教的にも寛容なイスラムを積極的に受け入れました。パレルモが首都になり200を越えるモスクや城館が立ち並びました。ここでまた陣内先生の説明が光ってきます。アラブ人は水を大事にし、水を扱う技術を発展させます。遠方から水を引き、灌漑システムを完成させ農業生産の向上につとめました。茄子、ほうれん草、メロンなどの農作物や米を伝え、木綿、砂糖、硬質小麦など現在の生活には欠かせない食物や繊維をもたらしました。パレルモ周辺には「緑したたる庭園」が生まれました。「パレルモは世界一美しいイスラムの都市」といわれました。

### ノルマン王朝「世界の驚異」

11世紀後半、シチリア島はまた異民族異文化の嵐を受けます。ヴァイキングが建国した北部フランスのノルマンジー公国の騎士たちが地中海への航海を重ね、南イタリアで傭兵として働き始めビザンチン勢力から南イタリアの支配権を得ていま

した。その勢力がシチリアのイスラムの統治がゆるみ始めているのをみて攻撃を重ねイスラム勢力を追い出す戦いを進めました。1071年、イスラム王朝下のパレルモは包囲され翌年降伏しました。シチリア伯となったロジェールは先にいたモスレムに敬意を払い、改宗を強行することはしませんでした。続くルジューロ2世は更に寛容な政策を採りました。ヨーロッパからもイスラムからも多くの学者を呼び寄せました。王自身が多言語を自在に操り各地から来た科学者や文学者と語りあったといえます。多民族共生の時代をつくりました。パレルモの王宮内に造られた「王室礼拝堂」の壁面は金地モザイクで聖書の物語が描かれ、天井はイスラム風細密画で埋め尽くされ、ラテン・ビザンツ・アラブの文化の折衷統合された空間を成しています。<12世紀ルネサンス>という言葉があります。ルネサンスは古典古代の再生です。古代のギリシャの科学はイスラム世界で保存されていましたが、パレルモの宮廷でそれらがラテン



語に翻訳されていきました。

「パレルモに行ってモンレアールを見ないのは驢馬（馬鹿）の旅のごとし」といわれるそうですが、堂内の壁が黄金の光を放つモザイク画という見事な大聖堂だそうです。隣接する修道院の回廊は細い円柱で囲まれ噴水もありアラブ風な雰囲気をもちスペイングラナダのアルハンブラ宮殿を連想させます。

13世紀のフェデリーコ2世はローマ教皇を後見人として成長し、エキゾチックなパレルモの宮廷で異教徒や庶民とも交わり文武に秀でた国王となりました。父親が神聖ローマ皇帝であったことで同様に神聖ローマ皇帝の冠を受けた王は、十字軍の遠征を命じられました。イスラムを敵対的に考えていない王は教皇の命令を先延ばしし、やむを得ず不承不精出陣した王は水面下の交渉によりエルサレムを無血開城させエルサレム王となるということでキリスト教世界へ義理をはたしました。しかし、教皇からは破門されてしまいます。王は教会の虚飾を憎み両者は内戦を続けるようになりました。知識欲旺盛、探求心に富み、近代に先駆けて中央集権国家のあり方を法令化するなど異色の行動力をもった王は「世界の驚異」といわれ、21世紀の今日更に注目されています。

## シチリアの凋落

フェデリーコの死後、教皇はフランスのアンジュー家を王位につけましたが、シチリア人の猛反対を受け、政情は不安定になっていきました。シチリアはその後スペインのアラゴン家、ドイツのハプスブルグ家など外国の王朝の支配が続きました。その中で島内の貴族は広大な所領をもち、都市に豪勢な邸を構え、遊惰な社交生活に暮れていました。かつて「穀倉地帯」と言われたシチリアの大地はやせ衰え凶作や飢饉にみまわれるようになりました。都市部では疫病も流行

り、特にパレルモに広がったペストは大きな被害をもたらしました。18世紀にはスペインブルボン家の領土になり、19世紀に短期間ナポレオンによる解放の動きもありましたが再びブルボン王家の支配となり古い体制が維持されました。

1848年、パレルモで独立革命がおこりました。これは16ヶ月で倒されますが、民族運動・独立運動として継続し、1860年ガリバルディーのシチリア遠征に呼応して義勇軍への参加も増え、ついにブルボン王家の支配を倒しました。しかし、イタリア統一運動は北部のサルディニア王国の主導下に行われたため南部に残る旧体制を変革することはありませんでした。支配者が単にブルボン王家からサルディニア王家への変更にとどまらず、大土地所有制の解体などの近代化は実施されませんでした。古い貴族から新興貴族への移行はありましたが農民の貧しさからの脱出は実現出来ませんでした。

映画「山猫」はルキーノ・ヴィスコンティ監督、主演バート・ランカスター、アラン・ドロンのクラウディア・カルディナーレという豪華スタッフの名画です。1860年のイタリア統一運動の時代のシチリアがテーマです。シチリアの大地、繁栄を過ぎて混沌としたパレルモなどを背景に滅び行く旧貴族、新興ブルジョワの姿を描いています。DVDが出ています。必見です。原作は岩波文庫にあります。

\*

南イタリア、シチリアは地中海を舞台に諸民族交流の歴史の舞台です。複雑な歴史を持っているので多少は予備知識をもって行くと更に興味が増すと思います。

### <参考図書>

「南イタリアへ！」	陣内秀信著	講談社現代新書
「シチリアへ行きたい」	小森谷慶子・小森谷賢二著	新潮社 トンボの本
「ナポリと南イタリアを歩く」	小森谷慶子・小森谷賢二著	新潮社 トンボの本
「南イタリア・プーリアへの旅」	木下やよい著	小学館
「山猫」	トマーゾ・ドゥ・ランバドゥーサ著	岩波文庫
「イタリア紀行」(中)	ゲーテ著	岩波文庫
「ノルマン騎士の地中海興亡史」	山辺規著	白水Uブックス

## 第4回総会報告

◆2010年度の総会は、6月19日(土)の午後2時から都立戸山高校で開催されました。

増田世話人代表の挨拶に続き鍵山世話人が議長に選出され、議事に入りました。

議案第1号では、2009年度事業報告が行われ、2009.6.13(土)の友の会第3回総会から2010.5.24(月)の第5回世話人会までの内容と出席者数・作業従事者数等が報告されました。

議案第2号では、2009年度会計報告が会計の小沢世話人から、監査報告が矢島世話人から行われました。

◆議案第3号では、2010年度世話人案が提示され、2009年度と同様の10名が選出されました。これにより今年度の世話人として、磯山進、小澤拓美、木村清治、黒田比佐雄、鍵山充尚、重政文三郎、豊田岩男、増田克彦、村木逸子、矢島恒之の10名となり、世話人代表には引き続き増田克彦氏を互選しました。

◆議案第4号では、2010年度事業計画として都歴研が実施する年2回の講演会、年3回の史跡見学会や全歴研海外研修旅行 8.18(水)～8.22(日) 4泊5日「中国山東省史跡めぐりー孔子・孟子の故地を訪ねてー」に参加すること、自主事業として第3回研修旅行 12.3(金)～12.10(金) 8日間

## 都歴研講演を聴いて

### 資料『洛中洛外図屏風』

友の会総会に続いて、都歴研総会の会場に移動し講演「『資料を読む』～洛中洛外図屏風を例に～」(国立歴史民族博物館/総合研究大学院大学教授 小島道裕氏)を聴きました。

1525年4月から10月の間に発注されたと考えられる「細川高国の事跡と1525年成立の植国政権の予祝」の絵とされる洛中洛外図屏風(国立歴史民族博物館所蔵)を中心に、資料から歴史をいかに読み取るかという、世界史畑の筆者に取っても興味の尽きないお話でした。皆さん、この図中でその家の当主が留守であることをどのように表現するか知っていますか。館を訪れる小中学生ともコラボレーションを行い、歴史の面白さを伝えているそうです。会員の多くが参加した昨秋の白石・米沢の旅で本物を見てきたその「上杉本洛中洛外図屏風」も話の中に登場しました。(豊田記)

「南イタリア・シチリア島」案が提案されました(自主事業の詳細はP15およびP20参照)

◆機関紙「友の会だより」第4号の発行は7月上旬とし、会員には都歴研紀要も同封されて郵送され、各都立高校歴史担当者には、従来の都歴研見学会委員会の秋季史跡見学会案内に便乗できなくな



## 都歴研友の会 第2回海外研修のご案内

- 1 研修先 南イタリア・シチリア島
- 2 研修日程 2010年12月3日(金)～12月10日(金) 6泊8日
  - ①成田ーローマー ナポリ ナポリ泊
  - ②ナポリ ナポリ市見学 ポンペイ観光 サレルノ泊
  - ③アマルフィー見学 マティーラ、サッシ岩窟見学 アルベロベッロ泊
  - ④アルベルベッロ見学 シチリアへ タオルミーナ泊
  - ⑤シチリア タオルミーナ観光 チェファルー観光 パレルモ泊
  - ⑥パレルモ観光 アグリジェント観光 パレルモ泊
  - ⑦パレルモーローマ 移動 ローマ発 機中泊
  - ⑧成田着
- 3 参加費用 254、500円 /担当旅行社 阪急旅行社/最小催行人数 15名
- 4 申し込み日程 意向調査 8月末 (FAX メールなどで) 参加条件等詳細は希望者にご連絡  
 FAX:04-2942-9512 メール:[mrk-7627@nifty.com](mailto:mrk-7627@nifty.com)(村木宛)  
 最終締め切り 10月中
- 5 事前学習 10月頃 場所などは未定

ったため、友の会として独自に郵送すること、会員拡大については、「入会のお誘い」を退職予定歴史担当教員(9名)と未入会の既退職者(7名)宛1月に送付し、送付方法は「友の会だより」と同様とすることが提案されました。

◆以上の案件の承認後、全歴研・関歴研等関係団体の情報が提供されました。(P14参照)

◆議案第5号では、2010年度予算案が提示され、通信輸送費が前年よりもかさむであろうことが指摘されました。

◆予算案の承認後、増田世話人代表から、全国歴史教育研究協議会のホームページ開設について、連絡がありました。今後、全歴研に係わる情報、あるいは大会等の諸行事参加申し込みはホームペ

ージを通じて行うこととなります。都歴研友の会事務局から全歴研関係の案内送付はなくなります。全歴研ホームページアドレスは次のとおり。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/zenreki-hp/>

◆総会のあと都歴研総会に出席し、増田代表から都歴研の内田和博会長に対して、都歴研活動を支援する目的で、援助金を手渡しました。

◆会費の納入は順調ですが、会員の新規加入が伸び悩んでいます。現職に対して、「入会のお誘い」を1月に送付します。お近くの方におすすめ下さい。このことに関連して、友の会への入会は歴史教員出身者でなくても、歴史に興味をお持ちの方なら誰でも参加できることをもっとアピールしていこうということが確認されました。

◆友の会への寄付は、初年度(2007)76,900円でしたが、その後も毎年寄付をいただき、現在累計では127,400円になりました。会の財政は寄付によって助けられていますので、たいへんありがたく世話人一同感謝しております。(豊田記)

【ニュース】 本会会員の樋口秀司さんが「高校野球育成功労賞」を受賞しました。20年にわたり都立大島高校野球部監督として指導にあたった功績により、日本高校野球連盟と朝日新聞社から贈られました。

### 友の会2009年度決算

収入	会費	112,000円
	寄付金他	9,500
	前年度繰越	102,000
	計	224,196
支出	都歴研援助	50,000
	通信輸送	32,130
	事務費	9,973
	会議費	400
	計	87,503
	次年度繰越	136,693
	会費前納金会計	92,000